



TITLE:

會津盆地に於ける核心[聚]落の分布 : 地方的小核心[聚]落の研究 二

AUTHOR(S):

山口, 彌一郎

CITATION:

山口, 彌一郎. 會津盆地に於ける核心[聚]落の分布 : 地方的小核心[聚]落の研究 二. 地球 1931, 16(4): 269-279

ISSUE DATE:

1931-10-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183960>

RIGHT:

會津盆地に於ける核心聚落の分布 (圖版第五版付)

(地方的小核心聚落の研究 二)

山口 彌一郎

一、緒言

純農村よりなる一地域に略々等密度に聚落が分布してゐる場合は、その核心聚落も略々等距離に發達してゐるであらうといふ考の下に、會津盆地にフィールドをとつて種々の作業を試みた本稿はその作業の二、三に就いて記したものである。御高教を仰ぐ次第である。

二、地方的核心聚落相互の

距離に就いて

(1) 地方的核心聚落の大きさ及び相互の距離、即ち密度はその地方の農村の購買力に依つて定まるものである。而してその位置はその農村の生産地域を遠心力の圏内とみて略々その中心地點に發達するのを常態とする。

會津盆地に於ける核心聚落の分布

(2) 佐々木彦一郎理學士は市場圏の地理的限界なる論文に於て善生氏の調査を引用され、朝鮮に於ては中心市場圏にある各市場への平均距離は一五—一七軒になつてゐる、六九・三%は二〇軒以内にあると言はれてゐる。(3) 佐々木清治理學士も市場圏の限界が二〇軒である事を述べてゐるこの距離はその都市の大きさに依つて限りなく延長されるものではなく、その地方の生産者と消費者とが相互して交易を行ふ場合、馬車又は徒歩による一日往復の距離が標準となり、東京市の如きも一般に取引時間を加へて十二時間を越ゆる事は稀であり、距離に於て二〇軒を越ゆる事はない。

表 一 第

核 心 都 市	大正14年 國勢調査 人口	核 心 都 市 相 互 の 距 離															
		3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	
會 津 盆 地	若松市	41.952				5.9 (本郷)				10.4 (高田)	11.5 (鹽川)	13.0 (坂下)					
	喜多方町	11.430					7.3 (鹽川)				11.8 (坂下)						
	坂下町	5.597							9.0 (鹽川)	11.8 (高田)							
	高田町	3.642				5.4 (本郷)											
	本郷町	3.010															
	鹽川町	2.002															
米 澤 盆 地	米澤市	44.602									12.5 (小松)	13.5 (高畠)	14.3 (赤湯)				
	長井町	9.541								11.5 (荒砥)	12.0 (小松)	15.0 (宮内)					
	宮内町	8.933	3.8 (赤湯)					10.6 (小松)									
	高畠町	7.390			6.5 (赤湯)							15.0 (小松)					
	赤湯町	6.031									13.0 (小松)						
	小松町	5.685															
	荒砥町	5.048															
山 形 盆 地	山形市	55.994					8.3 (山ノ邊)		11.3 (長崎)	12.7 (天童上ノ山)							
	谷地町	11.813					7.5 (寒河江)	8.3 (白岩)	9.5 (天童)	12.0 (東根)							
	上ノ山町	10.869					6.8 (左澤)										
	寒河江町	10.692				5.0 (長崎)	6.5 (白岩)		9.5 (天童)								
	東根町	9.377					5.5 (楯岡)		11.7 (天童)								
	楯岡町	8.747										14.0 (尾花澤)					
	天童町	6.880								10.5 (長崎)							
	山ノ邊町	6.321			4.5 (長崎)												
	長崎町	6.277								9.4 (左澤)							
	左澤町	5.765				6.0 (白石)											
	尾花澤町	5.642				3.5 (大石田)											

地

球

第十六卷

第四號

二七〇

三二

核心都市	大正14年 國勢調査 人口	核 心 都 市 相 互 ノ 距 離																
		3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17		
白石町	5,314																	
大石田町	34,16																	
横 手 盆 地	横手町	16,259						7.5 (金澤)	9.5 (淺舞)	10.8 (大森)	11.5 (十文字)	13.5 (増田角)	14.0 (沼館)					
	湯澤町	11,123		4.8 (岩崎)					10.0 (西馬音内)	12.5 (稻庭淺舞)	13.0 (横堀)		17.0 (沼館)					
	大曲町	10,133			6.5 (角間川)		7.8 (神宮寺)									17.8 (角館)		
	六郷町	7,325			6.5 (角間川)		6.0 (金澤)											
	増田町	7,246		3.0 (十文字)						12.0 (稻庭)								
	淺舞町	6,315		5.5 (十文字)		7.5 (沼館)				12.0 (西馬音内淺舞)								
	角館町	6,183																
	金澤町	6,021						9.5 (角間川)							16.0 (大森)			
	沼館町	5,106					7.0 (大森)								15.0 (西馬音内)			
	西馬音内町	5,011							10.0 (岩崎)									
	長澤町	4,814																
	院内町	4,165		3.0 (横堀)														
	十文字町	3,804		3.0 (岩崎)														
	神宮寺町	2,834							9.5 (刈和野)									
	刈和野町	2,834																
	角間川町	2,628																
	大森町	2,555																
	稻庭町	2,444																
	横堀町	2,169																
	岩崎町	2,161																

(c) 宿場町相互の距離も大約二〇粍に相當するらしい。東北裏日本の諸盆地中、圖上に於て筆者の測定せる核心都市の距離も第一表の如く横手盆地の角館町・六郷町間を除けば二〇粍を越すものはない。

(7) 鹿角盆地に於ても中心市場の花輪町の周圍にある各市場への距離は五(尾去澤村)、一〇(宮川村)、一二(毛馬内町)、一三(大場村)、一八(小坂町)粍で全部二〇粍以内である。

然し農村の生産地域の幅が、各核心都市の市場圏の半徑より餘りに小なる縦谷等の場合は、それ等の核心都市間の距離は稍々延長される様に思ふ。本稿は主として盆地を取扱ひ、谷に重きをおかなかつたが、然し福島縣中通り阿武隈川流域丈けを參考に取りてみると稍々盆地に於けると同様の觀がある。そしてやはり二〇粍を超過するものは極く稀である。

表 二 第

	核心都市	大正14年 國勢調査 人口	核 心 都 市 相 互 ノ 距 離																					
			10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24							
阿 武 隈 川 流 域	郡山市	42,984					13.3 (須賀川)	14.4 (本宮)																
	福島市	14,952				12.0 (桑折)											21.8 (二本松)							
	白河町	18,655						15.1 (矢吹)									21.0 (棚倉)							
	須賀川町	16,593				10.5 (矢吹)							18.1 (長沼)											
	二本松町	9,163				10.3 (本宮)																		
	本宮町	6,535										17.4 (棚倉)	18.2 (矢吹)											
	石川町	5,475																						
	棚倉町	4,743																						
	桑折町	3,930																						
	長沼町	3,612							16.9 (矢吹)															
	矢吹町	3,548																						

(72)

佐々木彦一郎

市場圏の地理
の限界

地理學評論
第四卷八號

(43)

佐々木清治

市場町の研究

地理學評論
第十四輯

(5)

西水 孜郎

東京市近郊に於
ける土地利用

地理學評論
第五卷十二號

(6)

佐々木清治

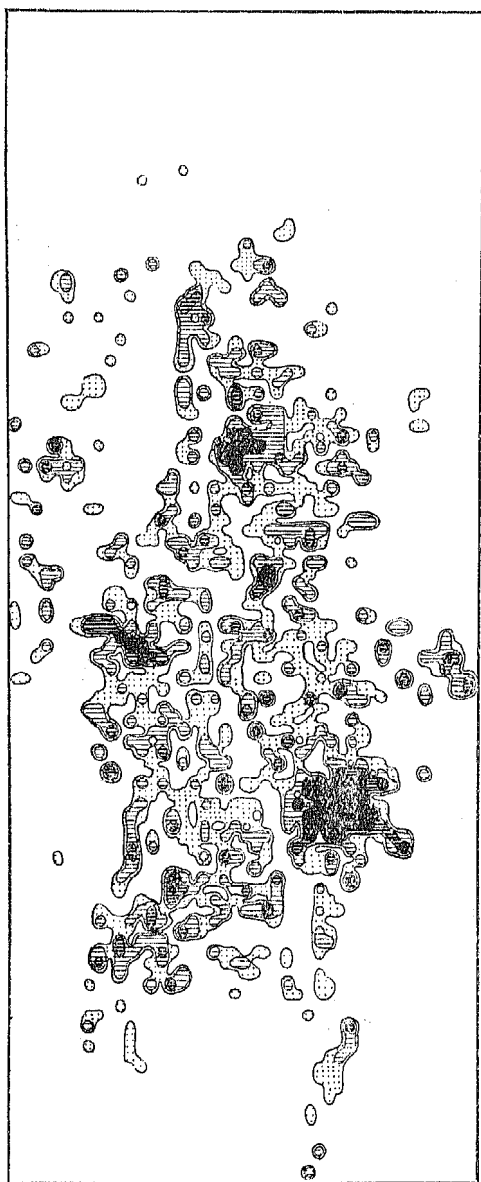
宿場町の研究

地理學評論
第十三輯

第一圖 人口分布

三、會津盆地に於ける聚落の分布
並びに人口、核心人口の分布

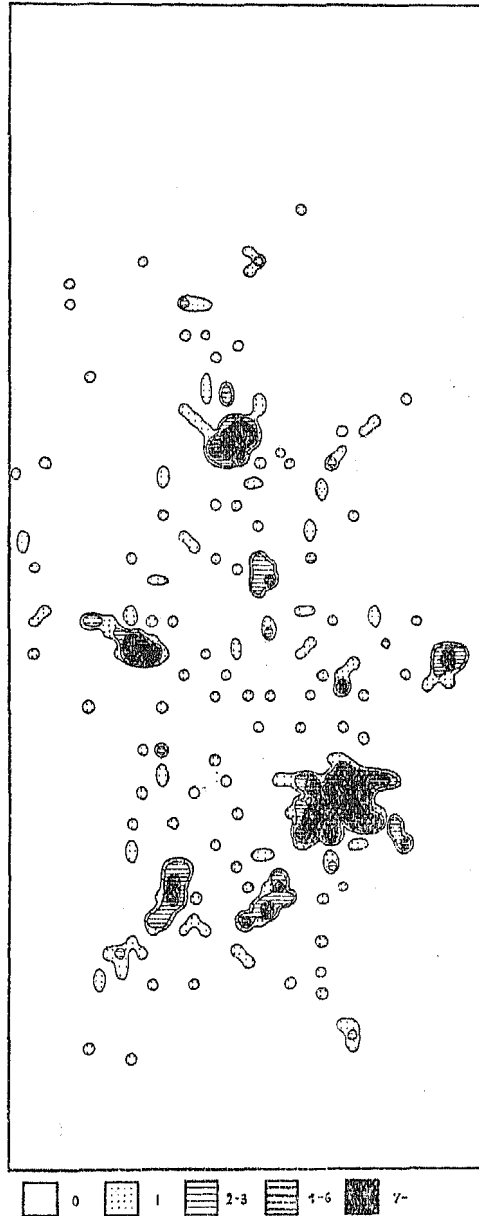
(1) 會津盆地に於ける聚落の分布は略二〇〇米の
等高線以上即ち盆地の周縁により多く存在する
斯の如き現象は鹿角盆地及び奈良盆地に於て



0 1 2-3 4-6 7-

會津盆地に於ける核心聚落の分布

第二圖 核心人口分布圖



も見られ、佐々木理學士の紹介されたワイル氏の盆地型なる名稱を附されたものである。
 核心聚落も總べて盆地の周縁に占居する。今人口の分布状態を知らんが爲めに、三澤氏の教ふる方法により筆者の作製せる一點を一〇〇人

とせるドットマップに一邊實長五〇〇米の方眼を被せてドットを數へ、等密度線を描いて見た。これによると盆地の略中央を貫流する大川流域に密度が少ない、そして他は殆んど大差なきも、山麓の核心都市附近は濃厚である。筆者は尙ほ

次の如き作業に依つて核心人口の密度圖の作製を試みた。

核心人口とは前稿に於て算出を試みた如く、全人口より、農、水、鑛業人口を引き去りたる數である、今この核心人口に對し一點を一〇〇人とし市町村別に點を打つていつた。そのドットの位置を決定するにはあらかじめ會津盆地の全聚落の踏査を遂げ、主として商店の多い聚落に打ち、適當な聚落の見當らない場合はその町村の略中央に打つた。技術的には相當の不安もあるが、分布の傾向は察し得られるものと信ずる。第二次作業よりは先の人口密度圖の作製と同様に、一邊實長五〇〇米の方眼を被せ、ドットを數へ等密度線を引いた。之れに依つて觀察するに、核心人口の盆地周緣地帯に多い事は先の聚落分布並びに人口分布より、より著しい事を知り得た。而かも本郷町が陶磁器工業地なるため核心都市としての考慮から除けば、核心人口の密度の大なる部分は略等距離に分布してゐる。

- (1) 山口彌一郎 會津盆地に於ける聚落の一考察 地理教育 第九卷四號
- (2) 佐々木彦一郎 盆地聚落の機構 地理學評論 第二卷九號
- (3) 西川與四郎 奈良盆地の聚落 地球 第五卷四號
- (5) 三澤勝衛 人口分布圖の調製に關する一考察 地理學評論 第六卷五號
- (7) 山口彌一郎 小野新町に就いて 地球 第十五卷六號

四、盆地底面積と人口並びに核心人口との關係

一地域内に於て農村人口が等密度に分布して居る場合をとりそして農村に於ける各個人が略々等しい購買力をもつてゐると假定すれば、農村に依つて生活する都市の人口はその都市の商業的勢力圏と相關してゐねばならない。然し實際に於て各個人の資力、年齢、性別、町への距離等に依つて此の推定は完全ではない。本項も單に机上の計算に終つたものが多い。

會津盆地に於ける盆地底の面積は五萬分の一地形圖上にて實測せる結果に依ると約三九九平

方籽ある。大正九年國勢調査に依る總人口一九九、二五六人中、核心的人口八五、八九〇人、農村人口(農・水・鑛業人口)に對する比は 1.32:1 である。核心都市のみ(若松・喜多方・坂下・高田本郷・鹽川)の核心人口は五六、〇〇一人で、その他の人口一四三、二五五に對する比は 2.56:1 となる。この五六、〇〇一人が都市にあつて地方農村の購買力を満たし、一方農村の人口に依つて支へられてゐるのである。東木氏の農村收益の分配人口なる意味もこの核心的人口を農村に分配して生活上の一團體を構成するとみる考の様に思はれる。この關係を基礎としてその核心都市の勢力範圍を算出するには次の如き方法を用ふる事が出来る。

核心都市の核心人口 $\times (1 + 2.56) \div \text{一平方軒の平均人口}$
(即ち $199256 \div 399 = 499.14$ 人)

計算の結果は次の如くなる。

若 松	二六一	喜多方	六六
坂 下	三〇	高 田	一五
本 郷	一五	鹽 川	一一

一平方籽未滿は四捨五入したので總計に於て三九八平方籽となり一平方籽を減じてゐるが考察には餘り影響しないとみて修正はしなかつた。然しこの數は實地踏査による都市的勢力範圍に比して何れも少で、若松市のみ非常に擴大されてゐる。これは若松市が他の核心都市のまな核心を占める爲である。

次ぎに人口分布圖並びに核心人口分布圖の一點を一〇〇人とし、被せた方眼の一邊を實長五〇〇米とした事に就いて附言する。

盆地底の面積が三九九平方籽あつて總人口が一九九、二五六人であるから、等密度に分布してゐるものとして一〇〇人の人口を含む地域を正方形とみれば一邊の長さは四四七・四米となる。故にその近似値をどつたものであるが又次の如き計算よりも近似値が得られる。

一人一年の平均食料米は約四俵とみられる。生活費總計が約その三倍かゝるものとすれば一年の生活費を全部米に換算すると十二俵になる

會津盆地に於ける一段歩の平均収入は約六俵であるから、一人宛二段歩を要し平方キロ米に換算し、總人口一九九、二五六人を支ふる面積は約三九五平方料となつて、筆者の圖上に於て測定せる三九九平方キロ料と近似してゐる。それで一〇〇〇人を支ふる面積を計算すれば正方形として一邊四四五・四米となる。(參考迄に附記すると、一世帯平均人口は五・五であるから、その生活を支ふる段別が一町一段・正方形とみれば一邊の長さが一〇四・四米となり、即ち約一邊一〇〇〇米の耕地に一世帯が支へられてゐる理になる)

以上の種々な計算は筆者の單なる試みであつて、吟味を要する點が多い。御教示を與へらるれば幸甚である。

(1) 東木 龍七 地誌學三六八頁

(2) 東木 龍七 農村政盆の分配 地理學評論 第七卷五號

註一 五萬分ノ一地形圖加納・喜多方・若松の三圖幅に含ま
るゝ六十三市町村の盆地底面積で、版圖第五版聚落分

會津盆地に於ける核心聚落の分布

表 三 第

核心都市	核心人口	距 離							平均
		7	8	9	10	11	12	13	
若 松 市	36.535				10.4 (高田)	11.5 (鹽川)		13.0 (坂下)	11.6
喜多方町	9.219	7.3 (鹽川)				11.8 (坂下)			9.6
坂 下 町	4.535			9.0 (鹽川)		11.8 (喜多方)		13.0 (若松)	11.3
高 田 町	2.055				10.4 (若松)	11.8 (坂下)			11.1
鹽 川 町	1.498	7.3 (喜多方)	9.0 (坂下)			11.5 (若松)			9.3
									10.6

布圖の山地を除く地域に相當する拙稿「會津盆地に於ける人口構成の統計的研究」(未發表)の作業と連絡を保つ爲めに本稿の作業も主としてこれ等三圖幅上で行つた

五、核心聚落の等距離性

一地域に於ける核心聚落の分布は、その地域内に於ける經濟的分布が均一である場合には略々等距離に發達する傾向をもつ、會津盆地に於て本郷町を特殊工業地として核心聚落より除外すれば、相互の距離は第三表の如くなる。

全部を平均すれば一〇・六軒となり、最大と最小との差は五・七軒にて、各都市の平均差は最大二・〇軒、全部の平均一〇・六に對して一割八分に過ぎぬ。

一〇・六軒が何に依つて決定されたかを考察するに、會津盆地は東西約一〇軒、南北約四〇軒であるから、盆地周縁に核心聚落の發達する一般性があるものとすれば、約一〇軒の距離は、即ち盆地の東西の距離に相當する事になる。これは又恐らく盆地周縁に核心聚落の發達する一因となつてゐるではなからうか。

核心都市の平均距離は、喜多方町を除けば都市の總人口並びに核心人口に比例してゐる。

次ぎに若松市が各核心都市の中心となつて統制してゐる意味を距離とその都市のもつ核心人口の相關からみれば、

第四表

核心都市	核心人口	若松市への距離
喜多方町	9,219	18.9
坂下町	4,536	13.0
高田町	2,055	10.4
鹽川町	1,498	11.5

高田町と鹽川町とが距離に於て反對になつてゐる外、他は順位になつてゐる。

然しこれ等の關係は各異例を含むのみならず、何處まで量的關係があるかは不明である。恐らくは盆地底の經濟的分布の不均一、盆地外との關係、都市の發生的意味等種々人文地理學上の交錯された事情があり、斯く簡單に都市間の等距離性を論及する事は困難ではなからうか。

六、結論

會津盆地に於ける核心都市の分布、就中等距

離性に就いて考察を試みたが、研究は未熟であり、結論を得るまでに至らなかつた。引き続き多くのフィールドをとり、種々の要項に就いて研

究を続ける積りである。終りに當研究に御助言を賜つた諸先生に厚く感謝申し上げます。

(昭和六年六月下旬)

新譯 日本地學論文集 (二七)

ライン——中山道誌 (三)

一、京都から美濃境まで(續き)

瀬田から宇治川に沿うて伏見に到る路があるが中山道は約一里以上距つた草津の方に向ふ、草津で東海道は東に曲がる。ケンプエルは夙にこゝに特に美しくて杖に作る爲めに採收される竹の根に就いて述べてゐる。「そこには苦い散薬が調製される」註 和中散のことであるといふ彼の他の記事で一八七五年夏のことを思ひ出す、その時私はケルン生れの益友博士ケーニヒス (Koening's) 君と一緒に名古屋から京都への路で草津を通過した。

詳しく云ふと草津に着く前、まだ東海道上で予等は一軒の宿屋に立寄つた、此の家の對ひに甚だ古い大きな藥屋がある。二階家の下の店に強く刻つた縁のある二つの古い額が懸つてゐた其の一つには主人の名が大きな藍色の支那字で書いてあり、他の額にはもつと大きな金字で教丸とある。此の有名な橙色の丸薬は見本として大な盆の上に置かれてあつた。予は其の二十粒を五厘(四ペニツヒ)で買つた、この薬は又高貴な起源を有する外に我々の薬と比べて甚だ廉價であるといふ大きな優越なる點を有する。予